

古代エジプトから日本の教育を考える

日本オリエント学会正会員
日本西洋史学会会員

西村 洋子

誰がいつから言い出したのかは知らないけれど、エジプトのピラミッドに「今時の若い者は……」という年長者の愚痴が記されているという。実際にはエジプトのどのピラミッドにもそんな落書きは記されていないのだが、古代エジプト人もそう言っていたに違いないと思わせる記述がパピルスに残っている。

それは今から約三千四百年前に書かれた『アニの教訓』（ブーラク・パピルス四）である。驚いたことにこの教訓の最後には、父親とその教えに反発する息子の対話が付されている。

息子…「そんなに沢山のことを言わないでください。私にはそれらをすべて行うことはできません。」

父親…「わしが言ったことはすべて正しく、これに従った者は誰でも従順になるのだ。」

息子…「力づくで押さえ付けずに、口答えや質問にも耳を傾けてください。誰もが

生まれ付き賢いわけではありません。」

父親…「つべこべ言うな。黙って聞き従いなさい。おまえは正しい教えを受けたくないのか。」

これを読むと、なぜこの教訓の作者は最後にこのような対話を付け加えたのだろうか、フツと笑ってしまふ。父親は息子のためを思って教訓を授けようとするのに、息子の方はそれを素直に受け取らない。教える内容は違ってても、現代日本における教育現場と何も変わらない。子どもが自ら学ぶ気になるまで待つて欲しい、詰め込み教育にはもううんざり、子どもたち自身が学びたいと思うことは何も学べていない。

本当に教育を取り巻く問題は古代エジプトの時代から何も変わっていないのだなあとつくづく思う。

もし何か違うとしたら、古代エジプト人（裕福な家庭の子弟に限る。）は十歳頃から書記

（官吏）見習いとして働かなければならなかった、あれこれ体験してから自分の進むべき道を見付けることなど出来なかった、という点だろうか。これは現代よりもはるかに寿命が短かった古代エジプトでは致し方なかったであろう。しかし、先程述べたような子ども側の不満は、教育を受ける者の甘えに過ぎない。二十歳過ぎまで、働かなくても教育を受けられるというのは、とても素晴らしいことなのだ。それは、学校に行けない人が圧倒的に多い社会を見ればすぐに分かることだ。そのような社会では、子どもたちは大人に酷使され、犯罪に関わられ、売り飛ばされて、ともに食べることも出来ずに、飢え死にしていくな。

また、自分が学びたいと思った時、教えてくれる人が周囲にいないければ、一体どうやって学ぶのだろうか。義務教育制度のお陰で誰でも生きていく上で最低限必要な知識は学べる。しかも独学よりはるかに効率的に、である。

一体何のために学校へ行くのか、何のために勉強しなければならないのか。このような疑問は、教育が支配階級ではない人々に対しても行われるようになってから生じた。古代エジプトで教訓文学が登場するのは、第一中間期ヘラクレオポリス朝の時代、すなわち今から約四千五十年前の、王国が二つの王朝によって二分され

ていた時代である。ヘラクレオポリス朝の王は息子メリカラーのために『メリカラー王への教訓』を著し、神が創ったこの世界の秩序を維持するために王はどのような行動を取るべきかを説く。マートと呼ばれる秩序の維持は、古代エジプトにおいて、一貫して王の責務である。

次に中王国第十二王朝、今から約四千年前になると、行政かつ司法の長である宰相が著した教訓が登場する。最も有名なものは『宰相プタハヘテプの教訓』である。ここでは、法と秩序を守る立場にある宰相はどのような言動をとるべきかが説かれ、この教えに従う者は人生の成功者となることを保証する。中王国時代には『宰相プタハヘテプの教訓』に倣って、多くの高官たちが自分の息子に教訓を説いた。彼らは国政の要職にある人々であり、その息子たちは高等教育を受けるのが当然であった。

ところが、新王国第十八王朝になると、帝国領土の拡大により、大勢の書記（官吏）が必要とされた。そのため中級官吏、下級官吏の息子たちを対象にした教訓文学や『ケミイト』と呼ばれる実用的な教科書が作られた。そこでは書記という職業が他の職業と比べていかに恵まれているかが説かれている。そのような教訓に『ケティの教訓』（『職業風刺』とも呼ばれる。）がある。金属細工師に始まって十八の職業の惨めさが述べられ、「書記の他に、主人のいない

職業はない。なぜなら書記が主人だからだ。」と説かれる。古代エジプトでは、書記になるために学校へ行き、勉強することは、神の道を歩むことであった。

しかし、教師から学童に当てられた書簡集から、華々しい手柄を立てて王から褒美をもらう軍人に憧れたり、あるいは勉強せずに酒場に入りしたり、美しい娼婦たちと遊んだりする者もいたことが知られている。冒頭の『アニの教訓』はこのような時代に書かれたものである。

まあこんな調子で子どもたちが父親や教師たちの教えを聴かないまま大人になるから、何千年経っても人間は進歩しないのだと筆者は思っている。

ただし、古代エジプトでは教育を受けられる子どもたちが就職で悩むことはない。勉強が良く出来ても出来なくても、大抵親の職業を継ぐことが決まっているからだ。

他方、現代日本の子どもたちは誰でも義務教育、続いて高等教育を受けることが出来るが、最終的にどんな職業に就くことになるのか分からない。だから、浅く広く勉強しなければならぬ。その結果学ぶべきことは際限なく増える。困ったことに、一生懸命勉強して沢山資格を取っても、それらは全く就職に結び付かない。そして、一体何のために学校へ行くのか、何のため

に勉強しなければならないのか、と堂々巡りの疑問を抱くことになる。

果たして現代日本において、教育は何を目的として行われるべきであろうか。もう大学受験と就職のためだけの勉強は止めるべきだ。自分だけが幸せになるために勉強するのではない。両親に楽をさせるために勉強するのではない。知恵と知識を活用して社会をより良くするため勉強するのではないのか。

そこで筆者は子どもたちを義務教育期間中にボーイスカウトやガールスカウトの活動に参加させることを提案する。というのも、筆者自身はガールスカウトの出身ではないが、ガールスカウトの親娘から聞く、その活動内容がとてもすばらしいと思うからである。ボーイスカウトの活動目標は、「仲間たちと自然の中で遊びながら、いろんなことを身に付けて、より良き社会人を目指すこと」であり、「より良き社会を作ること」である。ガールスカウトの活動目標は、「少女と若い女性が責任ある世界市民として、自ら考え、行動出来る人となること」である。

例えば、ガールスカウト愛知県第五六団の活動例を見よう。災害時に自分の命を守るためには、どんなことに気を付けたらいいのかを考える、新年のお茶会（自分でお茶を立てる。）を

開く、マリ共和国の水の問題を調べる、クリスマス会を催す、世界中の子どもの権利について調べる、ジェンダー・ジェンダーエンパワーについて調べた後、幸せな家庭を作るにはどうしたら良いかを話し合う、月見茶会の実施、ロープワーク訓練、新聞エコバッグ作り、森林公園キャンプの体験、七夕祭り奉仕、怪我をした時の応急処置法の訓練、スーダンについて調べるなど、この半年間の活動を見てもその内容が多岐にわたることがよく分かる。

ボーイスカウトやガールスカウトの活動を通じて、子どもたちは学校の勉強がどのように役立つのかを知ることが出来る、集団生活が出来るようになる、自分の意見をはっきりと言うことが出来るようになる、リーダーシップを培うことが出来る、社会のいろんな問題を知って解決法を見出すことが出来る、地域社会だけではなく国際社会でも行動出来るようになる、他の国の人々と接することで日本人であることを自覚出来るようになる、日本人として日本の国をもっと良くしたいと思う、そのために何をすれば良いのかを一人一人が考える、というふうにならないだろうか。

ガールスカウトの活動は就学前一年から高校生まで年齢に応じて行われているので、学校の勉強と両立させやすいだろう。また、スカウトの活動を取り入れる代わりに、先生方の負担の

大きいクラブ(部)活動を減じるのはどうだろうか。

ところで、知識重視の詰め込み教育を反省して導入された経験重視のゆとり教育は、なぜ失敗したのだろうか。子どもの力量や意欲が低ければ、詰め込み教育でもゆとり教育でも成功しない。教師の力量も要求される。さらに自分がやりたいことだけをやればいいという自己中心的な考え方を子どもたちに植え付けることになった。その結果、子どもたちは内向きになり、社会に関心を示さなくなり、自分さえ良ければそれで良いという自己中心的な大人になる。これでどうして生きる力のある人間、創造力のある人間、国の将来を考える人間が育つのだろうか。残念なことに、ボーイスカウト、ガールスカウトの数が減少しているという。スカウトの活動は保護者の負担が大きいので、簡単に子どもをスカウト活動に参加させられないというのが、その理由だそうだ。おそらく保護者が学校に、子どもの教育だけではなく、しつけも要望するのは、共働きのために子どもの面倒を見てやれないということもある。すると、教育内容や教育方法をいくら変えてみても、日本人の労働形態が変わらない限り、日本の将来を明るくしてくれる子どもは育たないということではないのか。筆者はそう心配するのである。

しかし、十七年前の阪神淡路大震災の後、人命を助ける医師や看護師、頑丈な建築物を建てる建築士、自衛官や消防士になりたいという子どもが急増したことを思い出そう。

昨年は東日本大震災が起こった。この時みんな復興のために頑張ろうという気になったではないか。そして私たちのもとに世界中から「頑張れ、ニッポン」とエールが届いたではないか。

大人も子どももこの時の気持ちを大切に持ち続けよう。その気持ちで社会をより良くしよう、国をより良くしようという気持ちにつながり、子どもたちは、誰から強制されることもなく自発的に学ぶのだ。

近い将来、艱難辛苦を乗り越えて、再び日本を発展に導く人物がきっと何人も現れるだろう。私たち大人が彼らを潰してしまわないことを祈るのみである。

参考文献

マチエ『エジプトの少年』(東京、岩波書店)、一九五五、復刻版一九九二。
杉勇他『筑摩世界文学大系一 古代オリエント集』(東京、筑摩書房)、一九七八。